

生物多様性

くまもとCだより

第5号!
(H30秋)



平成30年11月8日発行
発行元:熊本市環境局
環境推進部 環境共生課
TEL:096-328-2352



「生物多様性」って
何なんだ!?

「生物多様性を守るために」編②
～私たち一人ひとりができること～

「生物多様性」って何だろう?
生きものがたくさんいること??
—いやいや、それだけじゃない、
ふか～～～い世界が…

熊本市は平成28年3月、「熊本市生物多様性戦略～いきもんつながる くまもとCプラン～」(Cプラン)を策定しました。

これは、私たちのまちや暮らしを自然と寄り添いながら、魅力的にしていけるための計画。

だけど、「そもそも生物多様性ってなに?」…基礎的なことから最近の話題までをお知らせする

「生物多様性くまもとCだより」、第5号をお届けします!

生きもの・自然・生物多様性の情報を発信!!

『生物多様性情報のひろば(熊本市動植物園)』・
『熊本市の環境(環境局ホームページ)』 始まりました!



「“生物多様性”についてもっと知りたい!」「観察会やイベント、参加してみたいけど・・・」「熊本市ではどんな取組が行われているんだろう?」こんなことを思ったことがある方はいらっしゃいませんか?

熊本市の生物多様性の情報発信の拠点として、情報コーナー「くまもとC生物多様性情報のひろば」を熊本市動植物園動物資料館内に設置しました。生物多様性に関する行政・団体の取組や、イベント・観察会等の開催情報、また楽しく生物多様性を学べるツールなどを掲示や配布等により提供しています。動植物園に来園された方々をはじめとして、多くの皆様に、熊本市の生物多様性について知っていただくきっかけになればと思います。動植物園に来園の際は、ぜひお立ち寄りください!

また、8月に熊本市環境局ホームページが「熊本市の環境」にリニューアルしました。生物多様性をはじめ、熊本市の環境に関する情報に、よりアクセスして頂きやすくなりました。前号で紹介した『いきもんネット』登録団体によるイベント・観察会情報や、Cだより・生物多様性クロスワードパズルなどの教育・啓発ツールなども掲載しています。ぜひアクセスしてみてください!

「熊本市の環境」
トップページ→



生きもの、自然、
生物多様性関係
イベント情報→



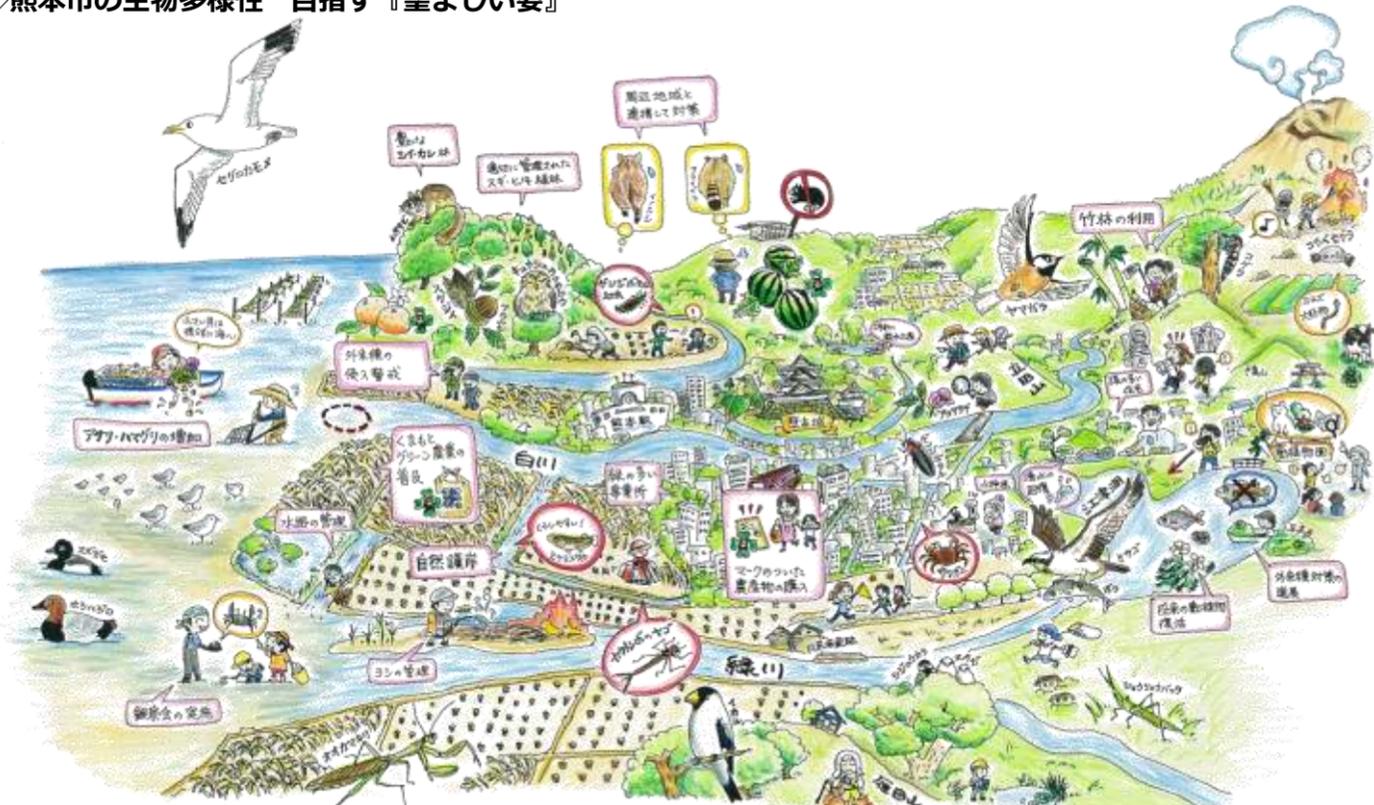
↑「熊本市の環境」トップページ



↑「生物多様性情報のひろば」
(熊本市動植物園・動物資料館内)

私たちの暮らしを支えている「生物多様性」。今回は、豊かな自然や生物多様性に恵まれている一方、解決すべき課題も少なからずある、熊本市の生物多様性の『いまの姿』を紹介しました。生物多様性のめぐみを将来に引き継ぐためには、わたしたち一人ひとりが、熊本市の生物多様性について考え、観察し、知り、行動していくことが大切です。そのために、熊本市が目指す『望ましい姿』について、考えてみましょう。

◇熊本市の生物多様性 目指す『望ましい姿』



上のイラストは、熊本市の生物多様性の現状と課題をふまえ、熊本市が目指す2050年の『望ましい姿』を描いたものです。Cだより前号(第4号)に掲載した『いまの姿』と比べると、どう変わっているのでしょうか?

ムササビやフクロウがすむ豊かな森林、メダカやヤゴ、ホタルの幼虫がすむ河川や水路、シオマネキやムツゴロウがすみ、渡りの時期にはシギ・チドリ類が飛来する干潟など、様々な生きものやそのすみかが守られています。

市街地や住宅地では、地域のお寺や神社の巨木などの身近な自然が受け継がれ、学校や公園、緑の多い事業所や住宅、街路樹など、「森の都」にふさわしい緑の街並みが広がっています。

里地里山・田園地域では、作物が豊かに実り、竹林や、スギ・ヒノキなどの人工林は利用されながら適切に管理され、イノシシなどの野生鳥獣についても、地域と連携した対策によってその距離が適切に保たれています。

江津湖では湧水量が回復し、外来種対策や在来の動植物の保全など、様々な人々の連携した取組によって、水辺の生態系が守られています。また、江津湖は隣接する動植物園とともに、生物多様性を学び、体験する学習の拠点となり、さらには水前寺成趣園とともに、熊本市の水の豊かさ・歴史・文化を実感し、水辺で休息したり遊ぶことのできる観光の拠点となっています。

干潟は資源管理などにより、アサリやハマグリ生産量も回復。将来にわたり使っていくめぐみ豊かな生産の場、また、干潟の生きものの観察をとおして自然にふれあい、学ぶ場として、人々に守られ、親しまれています。

都市でありながら、豊かな自然環境とそのめぐみにあふれた環境の中で、熊本市の人々は身近な自然や生きものを季節の変化とともに感じ、四季折々の祭りや行事、地域でとれた旬の食べ物などを楽しむなど、人と人、人と自然がつながりあい、いきいきとした心豊かな暮らしを営んでいます。

★目指す「望ましい姿」がイメージできたところで・・・

次回、「生物多様性を守るために」③～私たち一人ひとりができること(実践編)～に続きます!

注目! 12/1(土)熊本博物館 リニューアルオープン& 12/22(土)熊本市動植物園 全面開園!!

リニューアルのため平成27年7月から全館休館中だった熊本博物館が、平成30年12月1日(土)にいよいよオープン!「未来へつなぐ熊本の記憶」をテーマにたくさんの資料により熊本の歴史や自然について幅広く紹介しています。また、広くなった常設展示室では、江津湖の生態系を示すジオラマの展示や金峰山の貴重な生態系の紹介展示、県域の貴重な生物標本の県市連携展示などが新たに常設されます。

また熊本地震の影響で部分開園を行っていた熊本市動植物園が、平成30年12月22日(土)に全面開園することになりました。熊本市動植物園ではホンドギツネ・ホンドタヌキ・ニホンアナグマなど、熊本に生息する動物たちが新たに仲間入りしました。

熊本市の生物多様性についての学びの場・体験の場としてぜひご来館・ご来園ください!



↑熊本博物館HP



↑動植物園HP



↑熊本博物館・2階生物展示エリアの江津湖のジオラマ



熊本市動植物園で展示が始まるホンドギツネ(上)・ニホンアナグマ(右)

立田山は標高152メートル、面積およそ500ヘクタール、熊本市の市街地に残された貴重な「緑のオアシス」です。このうちの「立田山憩の森」（150ヘクタール）は、ウグイスやコゲラなどの野鳥、ウサギやアカガエルなどの動物、コジイの原生林、サクラなどの花木、スミレやハギなどの草花、ドングリやキノコなど、豊かな四季折々の変化を味わうことができる身近で大切な自然です。立田山自然探検隊は、1987年、この立田山をフィールドとして、子どもも大人も家族みんなで「自然に親しみ、自然に学ぼう」と発足。熊本市内の自然観察指導員を中心に、毎月1回、自然観察会を開催しています。今年度は「万石川の水源探検（4月）」「暗やみドキドキ探検（5月）」



↑「オタマジャクシに会う探検」開催風景

「キノコふしぎ探検（7月）」「ネイチュアフィーリング（10月）」「ドングリを食べる探検（11月）」「食べられる野草探検（1月）」「オタマジャクシに会う探検（2月）」などを計画。これまでに開いた観察会は、30年間で約300回、延べ1万3千人を超える皆さんと立田山を歩いてきました。また近年は、幼稚園や保育園の「自然観察・体験活動」のお手伝い（指導員派遣）、立田山のトンボやアカガエルなどの生息環境の保護や調査にも力を注いでいます。私たちは、これからも立田山の豊かな自然を護り、環境や自然にやさしい生活スタイルが普及するよう活動を続けていくつもりです。



↑「ネイチュアフィーリング」開催風景

おしらせ 11月25日（日）に、立田山野外保育センター「雑草の森」で、「紅葉・ドングリを食べる体験」が開催されます。詳しくは立田山自然探検隊ホームページ（<http://www001.upp.sonet.ne.jp/tatsudayama/schedule.html>）をご覧ください。



「立田山」
（提供：国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所）

立田山は、熊本市の中心部から北東に位置する小高い丘陵地帯で、常緑広葉樹・落葉広葉樹・アカマツなどの森林が混在するほか、湿地や草地、ため池など多様な環境があり、里地里山の生きものの重要な生息・生育地となっています。昭和40年代に宅地開発により深刻な危機に見舞われましたが、「立田山の緑を守ろう」という県民・市民の声があがり、昭和49年（1974年）度に、熊本県と熊本市は公有地化して保全することを決定し、平成7年（1995年）度に「立田山憩の森」の整備が完了、現在は散歩やレクリエーション、環境学習などの場として、多くの市民に活用されています。

現在、立田山の周辺はほとんど市街地になっていますが、タヌキやテン、アナグマなど約20種の哺乳類の生息が確認されているほか、クチナシが自然に八重咲きとなったヤエクチナシが自生し、「立田山ヤエクチナシ自生地」として、「国の天然記念物」に指定されています。また、立田自然公園（泰勝寺跡）の裏山には、コジイやアラカシなどが優占する自然性の高い森林が残っており、「立田山のコジイ林」として熊本県の「保護上重要な地域」に選定されているほか、立田山以外では関東地方の一部と三重県にしか生育していないカヤツリグサ科の多年草のトダスゲの生育地は保護区となっています。近年は、周辺部の宅地開発や、湿地やため池の植生の変化など、生きものの生息・生育地の環境が変化し、その保全が課題となっています。



↑立田山のヤエクチナシ

くまもといきもんノート ～ち.おなじみ“ドングリ虫”の正体とナゾ～



↑地面に落ちたドングリ（左）とハイロチョッキリの成虫（右）

晩夏から秋の間、青いドングリが落ちていたのを見たことはありませんか？ドングリはブナ科植物の果実ですが、種子と種皮と果皮のみで果肉の部分がなく、ほぼ“タネ”と言えるものです。だとすると、熟していない状態の青いドングリが落ちるのは植物にとって損失であり、自然に起こるとは考えにくい話です。葉の付いた小枝ごと落ちたドングリをよく見ると、“ぼうし”に小さな傷が見られます。これは、ゾウムシのなかまのハイロチョッキリが産卵した跡で、産卵後、彼らはドングリを枝ごと切り落とすしてしまうのです。なぜ枝を切り落とすのでしょうか？

ドングリが落ちた場所が車の通り道だったり、潮溜まりに落ちていたのを見たこともあります。だったら、落とさずに樹上に残しておいた方が良いのでは？とも思いますよね。彼らは、ドングリの中で大きくなり、殻から出て地中でさなぎになります。とすると、高い木の上から裸の幼虫が地上に落ちるよりは、卵のうちにドングリごと落下しておく方が安全かもしれません。また、葉っぱ付きの枝ごと落とすので、ドングリはヒラヒラとソフトに落ちてきます。

また、写真でもお分かりいただけると思いますが、幼虫はたったの2週間ではぼ中身を食べてつくしてしまいます。クヌギのドングリくらいなら余裕もあるかもしれませんが、普通サイズのドングリだと、おそらく彼らにとってはギリギリの量。と考えると、産卵後にドングリを落とす一番大きな理由は、「1つのドングリに複数の個体が産卵するのを防ぐ」ではないかと思っています。

最盛期には、コナラやナラガシワなどの木の下に青いドングリがたくさん落ちていたのを見ることができるとでしょう。育てて観察するもよし、釣り餌として使うもよし、小さな虫の暮らしぶりを一度確認してみたいはかが？



↑ドングリ内のハイロチョッキリの卵（左）と幼虫（右）

（文・写真）熊本博物館 学芸員 清水 稔

江津湖のほとりから

指定外来魚(6種)



このように、様々な生きものが指定外来魚に捕食されていることが確認されました。江津湖の生態系を保全するためにも、江津湖地域で釣り上げた指定外来魚は、回収いけすや回収箱に入れていただきますよう、引き続きご協力をお願いします。

環境共生課では、平成27年度から電気ショッカー船を導入し、江津湖地域の魚類の生息状況調査を行っています。その調査の中で指定外来魚の大きさや重さなどを調べるために、指定外来魚の捕獲を行っています。それら捕獲した指定外来魚のうち、魚やエビなどの生きものを主食としている3種（オオクチバス、ブルーギル、カムルチー）は胃の内容物も確認しています（累計約150匹で実施）。調査結果の一部として、胃の中で確認された生きものうち、特に多かったものをご紹介します↓。

調査結果

No.1 魚類 約3割の指定外来魚で確認	No.2 アミ類 約2割の指定外来魚で確認	No.3 エビ類 約1割の指定外来魚で確認
--------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

※その他にザリガニやイトトンボの幼虫などが指定外来魚の胃の中から確認されました。

～編集後記～ 秋といえば、「読書の秋」・「芸術の秋」・「スポーツの秋」などが有名ですが、秋ならではの風景や生きもの、旬の味といった、生物多様性のめぐみをより身近に感じることができる季節でもあります。色づく草木、風に揺れる稲穂、虫たちの鳴き声、キノコや秋刀魚、秋祭り、ドングリ拾いに夢中な子どもたち…。通勤・通学や行楽・お買い物などで外出された際など、身近な秋の生物多様性を、ぜひ感じてみてください。（環境共生課）



『熊本市生物多様性戦略』（本編・概要版）は、熊本市ホームページからダウンロードで入手可能です。ぜひ一読ください！

